

リーディングDXスクール事業【実践事例】

大仙市立豊成小学校（秋田県）【指定校】

【取組内容】 子どもを主語にした授業への変容～複線型の授業～

「関わりを通して高め合い、主体的に学ぼうとする子どもの育成」を研究主題とし、全校体制で研究を進めてきた。低学年では、教師主導による学びの割合を多めにし、学びの基礎の育成に重きを置いた。中学年以降では、単元内自由進度学習や複線型の学びを取り入れた単元構成に取り組んだ。

単元内自由進度学習

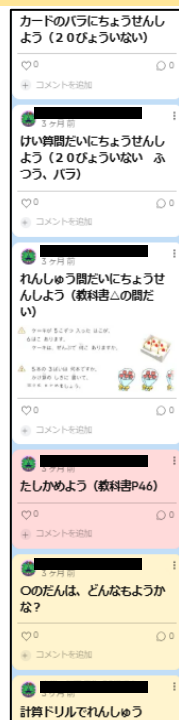
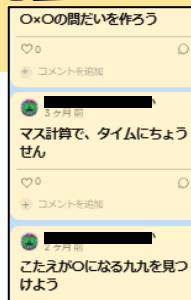
【2年】算数「かけ算」

児童が主体的に学ぶ授業として、2年生でも単元内自由進度学習に取り組んだ。乗法の意味を理解する場面は一斉授業を、九九を構成したり適用したりする場面は複線型で進めた。九九を構成する学習においては、はじめに5の段の学習の仕方をクラウド上で提示した後に、自由進度学習を行った。また、どのようなときに友達と学ぶと効果的なのかについても確認し、児童が教師の指示を待つことなく主体的に学んでいけるようにした。どの児童が今、どの九九について学んでいるのかを掲示したことで、児童同士でアドバイスを求めたり、進んで助言したりする様子が見られた。毎時間のはじめには、前時の振り返りや児童の疑問点や見つけたきまりについて共有させたい内容を意図的に取り上げる時間を設定し、終わり5分程度は、自分の学びについて確認できるようにオンライン掲示板へ振り返りの入力の時間を設けた。早めに課題をクリアした児童のために、「〇×〇の問題づくり」「答えが〇になるかけ算あつめ」「〇の段のもようづくり」などの課題を用意し、児童自らが選択し、挑戦できるようにした。

【3年】国語「わたしの町のよいところ」（書くこと）

1時間目は単元のめあてと学習の流れを一斉指導で確認。3時間を使い、児童はじつくりと自分の町のよさを紹介する文章を書き上げた。個の活動をしている中で、自然発生的に友達のアドバイスを読み合う様子が見られた。教師はイメージマップや、文の組み立てシートなどを学習支援アプリで用意し、児童が必要に応じて使用できるようにした。これにより教師は書くことに難儀している児童に十分な時間をかけて支援することができた。また、より児童一人一人の実態を把握することができるため、本単元の計画の見直しや「書くこと」の領域の授業構想について児童の実態に応じた場の設定を考えることができた。

学習の流れ

課題を達成した児童への
選択課題の提示児童の気づきを
クラウド上で共有

リーディングDXスクール事業【実践事例】

大仙市立豊成小学校（秋田県）【指定校】

【取組内容】 子どもを主語にした授業への変容～複線型の授業～

【5年】国語「想像力のスイッチを入れよう」（読むこと）

単元の前半（既習事項で学びを進められる内容）では、クラウド上に「学習の手引き」を配信し、それをもとに児童が自ら学びを進めた。クラウド上のデジタルノートをお互いに確認することで、協働する相手を選択しながら学びを進めていた。学習が停滞している児童を見逃さないように、課題ごとにチェックポイントを設けて、教師が児童の理解度を確認し、必要に応じて指導した。



My Goalを設定



お互いのMy Goalをもとに協働相手を選択



自分の考えとクラウド上の友達の考えを比べる

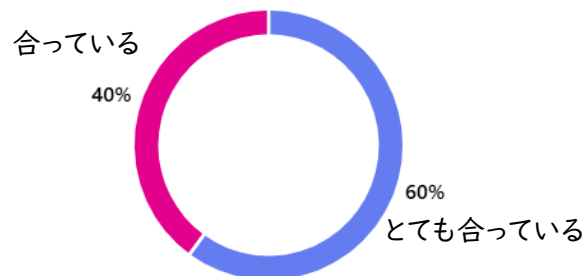


教師と学ぶ児童

児童の反応や成果

◎第5学年の児童（18名）を対象に学習アンケートを実施した。すべての児童が複線型の学びに対して肯定的に回答した。

Q:「複線型の学習スタイル」は自分に合っていると思いますか。



理由

- ・みんなと同じ課題で勉強するのは緊張して集中があまりできないので自分のペースで勉強するとじっくり考えて納得することができるから。
- ・今まではすぐに分かる勉強は余った時間が暇で、よく分からなくなった勉強は追いつけなくて時間が足りないのに、分かったふりで終わってしまっていた。でも、今は出来る勉強は突き進んで、分からないのは時間をかけて教えてもらったり、自分で考える時間がたくさんあって、全部分かった状態で単元を終われていると思う。
- ・4年生までは全部自分の力でやっていて、友達に聞いていいのか迷ったまま一時間すぎて、何もできなかったことがあった。友達と一緒に勉強したりするのはとても自分に合っていると思う。

【取組内容】 児童の自己調整を支える学習シート・学びの手引きの工夫

単元内自由進度学習や複線型の学びを進める際に欠かせないのが、「学びの手引き」や「学習計画・振り返りツール」であると考え。本校では、Excelや学習支援ソフトを活用して、単元を見通した学習計画を児童とともに作成した。1時間ごとのめあてや学び方を記したり、授業後の自らの学び方や理解度について振り返り、次時以降の学び方を工夫できるように促した。

下学年や年度当初の上学年では、課題解決のための方策をいくつか提示し、児童がそこから選択し、課題解決にあたるようにした。また、その学び方が適切だったのかを振り返ることを促した。学習に困難さを抱えている児童にとって、他者参照をすることで、やるべきことが分かったり、友達の考えを参考にしたりできるため、学習に向かう意欲が向上が見られた。

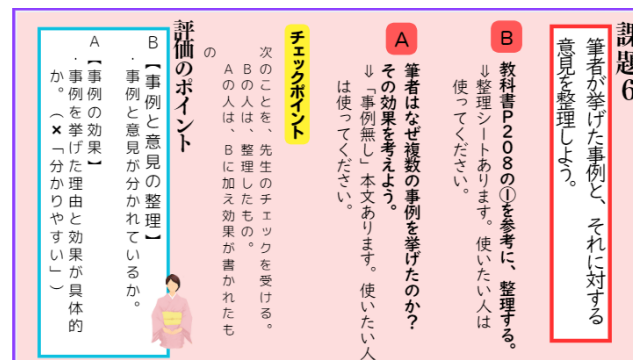
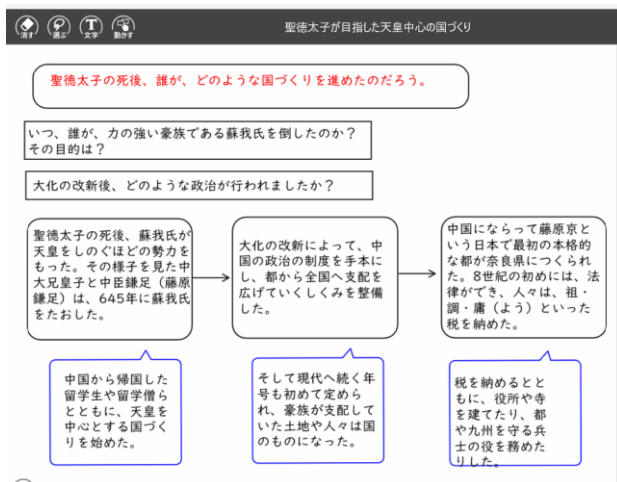
B	C	D	E	F	G	H	I	J
【2/7 時間目】		12月17日 (火)						
単元の学習課題				「想像力のスイッチを入れよう」を読んで、自分とメディアとの関わりについて、自分の考えを書こう。				
単元	今日の授業	By (K. A.)	今日の学びや (どうしたらKが達成できるか)	ノート	振り返り	文学教 カウント	ペア ワーク	発表
課題⑤	友達と一緒に序論本論結論を簡単にミ ニタイトルをつける。		序論ニタイトル「想像力のスイッチを入れる必要、 本論ニタイトル「想像力のスイッチを入れるとは、 結論ニタイトル「筆者が主張するべきこと」	今日の学びは？(何があった？) 今日の学びは？(何があった？) 今日の学びは？(何があった？)	今日の学びは？(何があった？) 今日の学びは？(何があった？) 今日の学びは？(何があった？)	42	月	
課題⑤	特に段落は大切に思うので、5人くら いと考えを確かめよう。		1-6番 フォーラム 5-10-11 6番 序論ニタイトル「想像力のスイッチを入れる必要、 本論ニタイトル「想像力のスイッチを入れるとは、 結論ニタイトル「筆者が主張するべきこと」	今日の学びは？(何があった？) 今日の学びは？(何があった？) 今日の学びは？(何があった？)	今日の学びは？(何があった？) 今日の学びは？(何があった？) 今日の学びは？(何があった？)	76	太陽	
課題⑤	まず縦向きに資料を準備よく読んだリブレ ンとくなくでその思考から結論なくと 考えではかの友達と一緒に見合いた りしよう。		序論ニタイトル「想像力のスイッチを入れる必要、 本論ニタイトル「想像力のスイッチを入れるとは、 結論ニタイトル「筆者が主張するべきこと」	今日の学びは？(何があった？) 今日の学びは？(何があった？) 今日の学びは？(何があった？)	今日の学びは？(何があった？) 今日の学びは？(何があった？) 今日の学びは？(何があった？)	68	月	
課題④	序論、本論、結論を分けて友達と確か めよう。		序論ニタイトル「想像力のスイッチを入れる必要、 本論ニタイトル「想像力のスイッチを入れるとは、 結論ニタイトル「筆者が主張するべきこと」	今日の学びは？(何があった？) 今日の学びは？(何があった？) 今日の学びは？(何があった？)	今日の学びは？(何があった？) 今日の学びは？(何があった？) 今日の学びは？(何があった？)	32	太陽	
課題⑤	序論、本論、結論をまとめるのなら、それ らに書いていることを簡単にまとめる。		序論ニタイトル「想像力のスイッチを入れる必要、 本論ニタイトル「想像力のスイッチを入れるとは、 結論ニタイトル「筆者が主張するべきこと」	今日の学びは？(何があった？) 今日の学びは？(何があった？) 今日の学びは？(何があった？)	今日の学びは？(何があった？) 今日の学びは？(何があった？) 今日の学びは？(何があった？)	64	太陽	

↑ 学習計画・振り返りシート

[illegible]

↑ いまドゴシート

← ↓ 学びの手引き



今、どの内容を学習しているのかを見
合うことができる。また児童の進捗状況
について教師が把握できる。

児童が複数の方法の中から学び方を選択できるように、選択肢を示す。チェックポイントの観点を示し、児童が学ぶ道筋を示す。

リーディングDXスクール事業【実践事例】

大仙市立豊成小学校（秋田県）【指定校】

【取組内容】 学び方を学ぶための手立て

(1) 教科書の読み方を学ぶ

児童が教科書をもとにして、自ら学んでいけるようにするために、年度当初に教科書の活用例を知る時間を設定した。

児童には、「教科書って考えられているな。」「だからこの資料があるのか。」「この文とこの資料がつながっているね。」などの新しい気づきが生まれた。

デジタル教科書の画面を示しながら、→
社会科の教科書の活用例を確認。



(2) 児童が授業を見合う会の実施

上の学年の学習の様子を参観し、学び方を学ぶことを目的とした時間を設定した。1年→2年、2年→3年、3年→4年・・・

児童のみならず、教師側も、上の学年でどのような学びを行っているのかを理解し、発達の段階に合わせて学びを進めることの重要性を再認識するとともに、校内の研修体制の共通理解にも役立った。



4年算数「面積の求積」の学習では、3年生の児童はノートやPCにメモを取りながら参観。
中には、4年生の学習に興味をもち、自分なりの面積の求め方を考えている児童もいた。

リーディングDXスクール事業【実践事例】

大仙市立豊成小学校（秋田県）【指定校】

【取組内容】インクルーシブ教育の視点を取り入れたICTの活用

デジタルノートの活用

形が整った文字を書くことが苦手な児童は、特別支援学級にも普通学級にもいる。そこで特定の児童に教育的配慮として認めていたデジタルノートを全ての児童が使用してもよいことにして活用を試みた。特例として認めてしまうと、教室に「ずるい」等の感情が生まれ、本当に必要とする児童が使いづらくなってしまったためである。これまでは紙のノートのみを使うことにしていたが、デジタルでも、紙のノートでも可とした。紙のノートでは難しかった図や写真を挿入したり、より構造的にまとめたりする児童も増えた。また、消しゴムで消すことが苦手であったり、消し跡が気になったりする児童にとっても、書き表すことのハードルが低くなった。さらに自分に合ったまとめ方を工夫することができたり、他者参照をして友達のまとめ方を参考にしたりするなどの効果もあった。

同様に、単元の終末に意見文を書く学習では、ねらいを「～についての意見文を書くことができる。」とし、アウトプットの方法は、ノート、原稿用紙、Wordといった選択肢を示して、児童が選択できるようにした。多くの児童は、Wordなどのデジタルを選んだが、経験を重ねると、アナログによるアウトプットの方が自分には合っていると感じた児童もいた。

書字が苦手な児童の中には、ディクテーション機能を活用したり、学習支援ソフトの音声入力機能を活用したりする児童もいた。書字の方法を、複数想定したことで、特別支援学級の児童のアウトプット意欲が以前に比べ高まり、自立活動での表現力の向上が見られた。

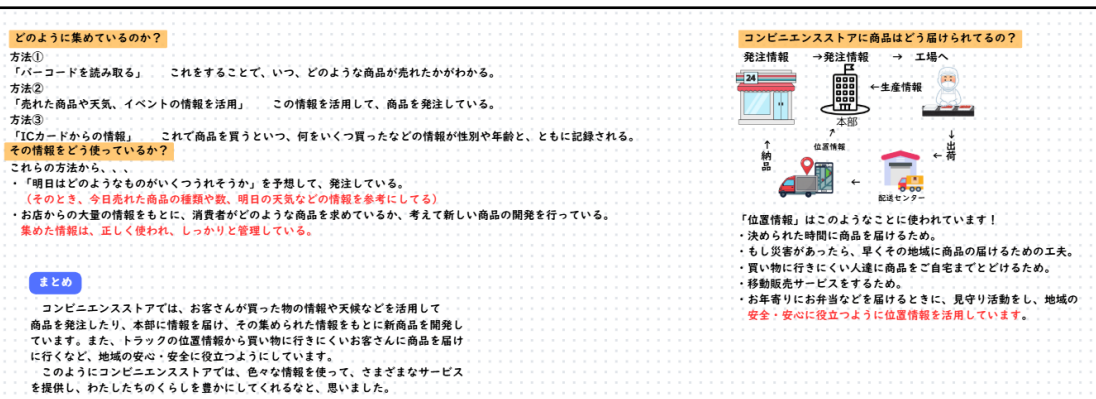
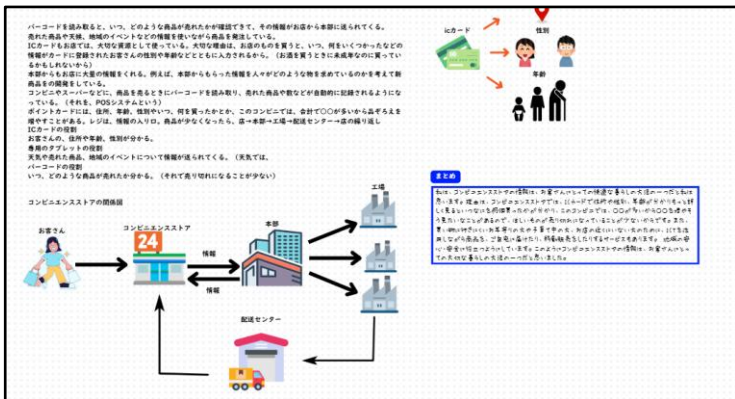
4 「米農家の工夫と努力」

現在	昔
「トラクター」などを利用して、田おこしをしている。 「田植え機」などを使って、田植えをしている。 「コンバイン」を使って、稲刈りをしている。	「トラクター」などはなく、牛などをひいていた。 「田植え機」はなく、手作業ですべて植えていた。 「コンバイン」などはなく、カマなどを使って刈っていた。
機械のメリット - 農家の人数の「労働時間」がほとんど短縮されてくる。 - 効率的に作業ができ、「生産性」が高まった。 - 便利になり、稲刈りが楽になった。	機械のデメリット - 機械は高価なものが多くて、買えない。 - 手作業の大変さが分からない人が増えていく。 - 米づくりの能力がなくなっていく。

自分の意見（思ったこと・感想）
昔の農家の人たちは、「トラクター」、「田植え機」、「コンバイン」などの便利な道具がなかった。ほとんど自分たちの手で田おこしをしたり、田植えをしたり稲刈りを行ったりとても大変だったという事が分かりました。または、機械は高価と比べると便利な道具が限られていて、稲刈りが楽でなくて、大変だったと思います。

構造的なノートを工夫

イラストや図を入れて画一的ではないノート



リーディングDXスクール事業【実践事例】

大仙市立豊成小学校（秋田県）【指定校】

【取組内容】 情報活用能力向上のための全校体制の時間

(1) タイピングマンデーの実施

毎週月曜日の15分間は、全校でタイピングスキルの向上を目的とした時間を設定して取り組んだ。その他にも、学年によって、パソコンの基本操作を学んだり、生成AIに触れたりした。また低学年では、継続的な習得練習として、毎日の振り返り（日記）を入力する時間を設けた。

2年生:11人中7人

⇒1分間で30文字以上

6年生:23人中18人

⇒1分間で60文字以上

(2) 上学年から下学年へ

PCを手にした1年生に対して、6年生が使い方を指導した。一緒に課題を達成することで、1年生は安心してPCに触れることができていた。



(3) 各教科での情報活用能力の育成

各学年、各教科で情報活用能力育成の視点を取り入れた授業を行った。

【6年 国語】 提案文「デジタル機器と私たち」（書く）

デジタル機器を使う際に気を付けるべきことを、インターネットや図書資料などを使って情報収集した。その出典を明記し、友達同士で読み合う際には、その情報が適切かどうかを検討した。

(4) 情報モラル教室の実施

毎年情報モラル教室を実施している。今年度は、インターネットやスマートフォンの「危険」の面だけでなく、「より良く使う」ことを目的に講演をいただいた。



リーディングDXスクール事業【実践事例】

大仙市立豊成小学校（秋田県）【指定校】

【取組内容】端末の日常的な持ち帰りによる家庭学習の推進・不登校児童への対応

(1) AIドリルの活用

本校では、家庭学習にドリルソフトを活用する児童が多い。アンケート調査では4年生以上の全児童が「ドリルソフトの活用でよく分かった・できるようになった。」と肯定的に回答した。担任は、一人一人の学習状況の把握とつまずき等を確認しその児童に合った課題を配信して、学習を支援した。またドリルソフトは、前の学年に戻って学習ができるため、特に上学年では、積極的な活用が見られた。

つまずきが見られた児童へは、直接コメント機能を使ってアドバイスをしたり、翌日学校での補充指導を行ったりした。

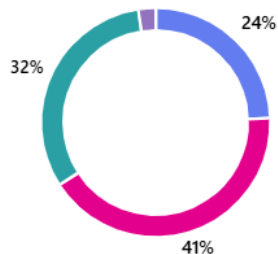
学習履歴 100% 100% 100%

学習履歴は、子どもがドリルソフトの学習履歴と連携した学習履歴から構成されています。
学習履歴は「学習履歴」タブで確認できます。学習履歴は、授業に活用される。
学習履歴は「学習履歴」タブで確認できます。学習履歴は、授業に活用される。

学年平均	34.000 88.0	575.6	75.2%	3604.2	2710.9	209.0
クラス平均	34.000 88.0	575.6	75.2%	3604.2	2710.9	209.0
1	34.000 88.0	575.6	75.2%	3604.2	2710.9	209.0
2	34.000 88.0	575.6	75.2%	3604.2	2710.9	209.0
3	34.000 88.0	575.6	75.2%	3604.2	2710.9	209.0
4	34.000 88.0	575.6	75.2%	3604.2	2710.9	209.0
5	34.000 88.0	575.6	75.2%	3604.2	2710.9	209.0
6	34.000 88.0	575.6	75.2%	3604.2	2710.9	209.0
7	34.000 88.0	575.6	75.2%	3604.2	2710.9	209.0
8	34.000 88.0	575.6	75.2%	3604.2	2710.9	209.0

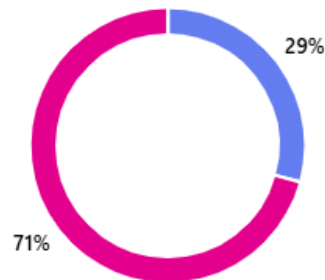
Q AIドリルの活用により、家庭学習にどのような変化がありましたか。（対象：4年生以上の児童）

- 家庭学習の量が増えた
- 家庭学習の質が向上した
- 変わらない
- 家庭学習の量が減った
- 家庭学習の質が落ちた



Q AIドリルの活用で学習がよく分かった・できるようになったと感じますか。（対象：4年生以上の児童）

- とてもそう思う
- そう思う
- 思わない



(2) 不登校児童への支援

不登校児童のために、オンラインで授業を配信した。Teams上にアップされた週計画（時間割）を確認した児童は、Teams上の個人チャネルで「今日は〇時間目の■■■を受けたいです。」と連絡する。その時間になるとオンライン接続で授業を受ける。

「学級の様子が分からないことが怖い（不安）。」と述べていた児童だったが、オンラインで授業を受けることで、学級の様子が分かり、以前に比べ不安感が減ったという反応もあった。校内の別室に登校することもできるなど、効果が見られた。また、保護者からも、授業の様子が把握でき、家庭学習にも役立てられるという反応があった。

リーディングDXスクール事業【実践事例】

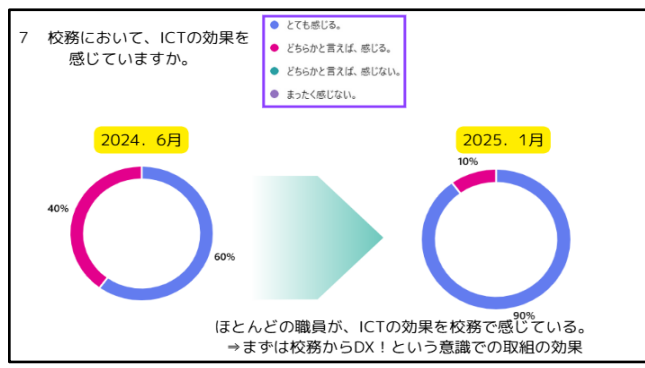
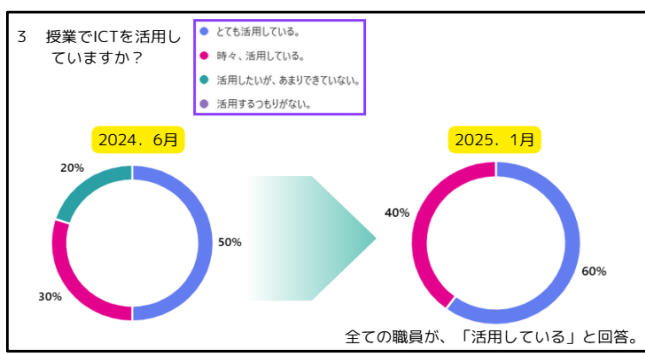
大仙市立豊成小学校（秋田県）【指定校】

【取組内容】 教員間のICTの苦手を取り払う研修の実施

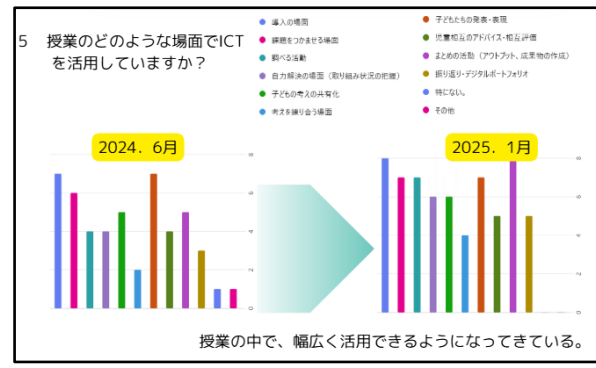
職員研修会、ミニICT研修の実施

本校では今年度、「インクルーシブ教育」と「複線型の学び」をテーマに研修を深めてきた。職員の共通理解を図る必要があり、研究主任とICT主任が中心となり研修を進めた。また、先進校視察に参加した職員による研修報告会を行い、研究の方向性を再確認した。ミニICT研修も行った。職員に研修希望アンケートを実施し、希望の多い内容の研修を取り上げた。ワークショップ型の研修を多くして、研修の学びを次の日の授業から生かせるような中身とした。

職員のICTに関わる意識調査



↑「複線型」や「インクルーシブ教育」に関する研修



Teams上で希望を募り、
研修内容を決定↓



リーディングDXスクール事業【実践事例】

大仙市立豊成小学校（秋田県）【指定校】

【取組内容】ICT×特別支援教育・インクルーシブ教育についてのオンライン研修

海老沢 穰 氏 によるオンライン研修会の開催

ICTと特別支援教育・インクルーシブ教育の視点について研修を深めるために、一般社団法人SOZO Perspective 代表理事の海老沢穰氏に講師を依頼し、12月に研修会を実施した。

「特別支援教育におけるICTの活用について—子どもたちの長所・強みを引き出すICTの活用について—」と題して、お話していただいた。「学びとは？授業とは？」という根本について、授業そのもののデザインを改めて考え直す示唆を与えてくださった。

また、市内の各校に参加の希望を募り、10校とオンラインをつないで一緒に研修を深めることができた。



— 子どもたちの長所・強みを引き出していくために —

アイデアや表現のツールとしてICTを活用する

ICTで選択肢を広げる

今までの当たり前や前例に捉われず、
柔軟な発想やアプローチを試みる

101



参加者の感想（抜粋）

ICTの研修というと、何をを使うか
Whatや、どのように使うかHowを求めがちですが、やはり、なぜ使うのか？何の目的で使うのか？Whyが大切だと再認識しました。いろいろな情報、アイデア、書籍のご紹介、本当にありがとうございました。

ICTを使い始めて3年、真剣に使い始めて2年になります。子どもたちから教えられることも多々あり、まだ、学びの途中です。最近感じるのは、「デジタルでもアナログでもどちらでもいい」というと、アナログを選択する子供がいます。その子供に合った方法を、こちらから提示する必要性を感じました。まだまだ、どのようなツールとして使えるかを、子どもたちの実態を見てこれから考えていきたいと思います。

子供たちにとって「自分事」となっていること、当たり前を変えて柔軟な発想やアプローチを試みることなど、特別支援学級で大切なことは普通学級でも大切にしていきたいことだと思いました。ICTを包丁に例えて教えていただいたこともわかりやすくスッキリした気持ちになりました。

ICTを使うということではなく、ICTを使うことで、子供のやる気を引き出すことが一番大事なのだと感じました。

ICTはアウトプットするためのツールであるということ。先生がやりたいことではなく、生徒の自分事になっている学びであるのかを考えながら授業を作っていきたいと思いました。また、生徒が表現するためのツールとして選択肢を増やしていくために、私たちも学んでいかなければならないと思いました。